

熊本学園大学 機関リポジトリ

フェルナン・ゴンサレスの詩(うた)(1) (林日出男教授 柴公也教授 吉田良夫教授 退職記念号)

著者	岡村 一
雑誌名	熊本学園大学文学・言語学論集
巻	27
号	1
ページ	141-174
発行年	2020-06-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1113/00003358/

*
フェルナン・ゴンサレスの詩^{うた} (一)

一 祈願

作者不詳 岡村 一 訳

万物の創造主たる父、美しき聖母より生まれいでんと望みたもうた子、お二方と一体たる聖霊の御名において、拙き言葉ながらカステイリーリヤ伯の物語を語ろう。天地を創造したもうた主はよき師にておわせば、往古のことども教えたまい、そのおかげにてわたしは語れるであろう、いかに伯が海に臨むさいはてからさいはてまで寸土も余さずわがものとしたかを。されどまずはあなた方に語ろう、われらの父祖がいかに国を失い、いかなる辛酸をなめたかを。いかに寄る辺なき身となり逃げ惑ったか、死に時を失いいかに血の涙を流したかを。われらの父祖は果てしなき艱難辛苦を忍び、次々襲いくる血も凍る恐怖に耐え、いくたびも苦汁を飲んだ。寒さに凍え、飢えに泣き、あまたの苦しみに打ちひしがれた。当世楽しみであるものは往時は苦痛をもたらした。さしあたりかの時代を語ろう、いかに領土を失い回復したか、(……)最後に人々がこぞってドン・フェルナンド伯の旗のものとへ集まるまでを。語り聞かせよう、古い時代にはじまる長い長い物語、気高きドン・ロドリゴ王が国を譲られるまでのいきさつ、不倶戴天の敵に国を奪われ、輝かしい栄誉の座からあわれな乞食へ転落したいきさつを。元凶はムハンマド、邪教の徒。(……)弁舌を弄し嘘八百の教えを吐きちらした。ムハンマドが広く教えを説きだしてより、人の心は変わり果て(……)キリストの死も忘れ果てた。一方スペインの人々はキリストを知り、教

えに則って洗礼を受けるようになってより、もはや他の教えには見向きもせず。反対に志操堅固であったため、幾多の苦しみを味わった。説き聞かされた聖人の方の奉ずるこの教え、それを守り、おびただしい血を流した。使徒、殉教者、この神兵の軍団は刃にかけられ真理に殉じた。純潔の聖女らは揺るがぬ信仰を持ち、肉の交わりをよしとせず、現世の悪徳に心を動かさず。かくして悪魔に勝利した。古代の預言者らはこれを予言し、聖なる証聖者らはこの教えを説いた、他の神々には真理のかけらをも見いだしえなかったゆえ。聖ヨハネは斬首に際し、これを証した。ゆめゆめ疑うなかれ、この教えを守り命を落としたあまたの王侯貴族、教皇、大司教、司教、僧院長、彼らはそれにより天国でまつたき居場所を得ている。

二 ゴート人

本筋へ戻って先へ進み、物語の起点としたスペインへ帰り、文書の記述に従い語っていきこう。手はじめはわれらがゴート人と呼ぶ古代の歴代の王。このゴートの民はまだ未信者であった時代、キリストに導かれ東方よりやってきた。マゴグの血統を継ぐ彼らは世界を限なく征服した。このゴート人、もとのキリスト教徒ではなかった。といってエジプトからきたユダヤの民でも、ギリシャ、ローマの神々を信じる者でもなかった。そうではなく別の神を崇めていた。雄々しい人々であり、武運ことのほかめでたかった。ローマの版図を寸土も余さず荒らしまわり、人々をあるいは虜とし、あるいは討ちながらやってきた。(……) やがてその強大な軍勢はスペインへ至った。(……) それは教皇アレクサンデル聖下の御代のこと。彼らはスペイン全土、陸の尽きるころまで欲した。町も城も彼らを前に守る術なく、加えてアフリカもトゥーレーヌも支配下にはいった。彼らは術策にすぐれ、なおそのうえ神のお導きがあった。やがてゴート人に聖霊が降臨し、すべては悪しき教えと悟った。自分たちの偶像是罪の源、それに帰依し、みな大きなあやまちを犯していると気づいたのであった。彼らは帰依すべきドン・キリストの信仰を理解すべく師を求めた。師らは、さあ、それはもう喜び勇んで赴き、教えを余す

ところなく説き聞かせた。師らは言った。

「これはすべて無益、あなた方は聖なる水で洗礼を受けておらぬゆえ。このような罪、あやまちは異端と呼ばれるもの。だが罪にまみれた魂はただちに清められるであろう」

ゴートの民は水を注がれて洗礼を受け、全キリスト教徒の光となり星となつて、キリスト教の威信を高め、異教を貶めた。フェルナン・ゴンサレス伯のなしたこともこれと同様であつた。(……) 家臣らは赤心をもつて忠義を尽くした。ゴート人は全世界から特別に選ばれた民。世の終わりにまで忘れられはしまい。歴代のゴート王はこの世を去つたのち天へ昇り、おおいなる王国を受け継いだ。あるとき、王を失つた民は、だちに次の王を推戴した。文書の伝えるところによればドン・レクスヴィントという人。豪勇レクスヴィント王の治世、スペインの司牧者はエウゲニウス。この尊い証聖者がトレドにあるとき、セビーリヤには大司教にしてその領主である聖イシドロスがいた。やがて正統な王としてスペインとアフリカを支配したレクスヴィントはこの世を去つた。次に創造主はゴートの民に願つてもない牧者をお与えになつた。先王にまさるとも劣らぬワムバ王が後継者となつたのであつた。周知のごとくこのワムバ王は特別に選ばれた民であるゴート人の血統に連なつていたが、王位に就けられるのを嫌つて身を隠した。ワムバと名乗つたのも正体を知られぬためであつた。人々はスペインじゅう探しまわつて彼をみつけどし、押しつけるようにして王国を受け取らせた。というのも彼は毒殺されると信じ、王となるのを喜ばなかつたのである。ワムバ王はこのほか心正しく、ことのほか気質すぐれ、ことのほか腹太く、ことのほか知恵に秀で、ことのほか周到、律儀、誠実、そしてことのほか運に恵まれた人であつた。弑逆の謀反人は世の末に至るまで憎まれてしかるべし。ワムバ王は国土を区画し、司教区を整理し、(……) 管轄区を定めて管轄の範圍を定めた。万事よい形になつたものの、王がこの世にあることが耐え難い苦痛であつた悪魔が毒を盛り、そのせいで王は死んだ。正統な王にして希有の名君の天国にあらんことを。あとに立つた王はエギカという名。在位わずか二年。二年でこの世を去つた。疑うべくもない悪王であつたので民は悲しまなかつた。エギカが登位後ほどなくして死んだあと、全土に君臨したのはヴィティザ。このゴートの申し子は傑物。勇猛果敢な益荒男であつた。ヴィティザの死後、ド

ン・ロ德里ックが王位に就いた。イスラム教徒はこの王を不倶戴天の敵と憎んだ。王はキリスト教徒の庇護者、偉大な守り手、しかし犯した罪のせいで神助がなかった。ロ德里ック王は海の向こうに広大な領土を有していた。豪の者の本領を発揮し、モンテス・クラールスを奪い取ったのであった。(……)

ロ德里ック王が国を失ったいきさつは断腸の物語。当時スペインはただひとつの信仰でまとまり、誰もが聖母の御子に頭を垂れていた。かくも敬虔な信仰に、悪魔は業を煮やしていた。人々は互いに妬まず争わず。教会はいずれも整然と保たれ、油も蝋燭も十分に調達が叶い、十分の一税も初物も誠実に納められていた。どの人の心にも信仰が強固に根づいていた。農民はみな粒々辛苦して暮らしを立て、権勢を誇る人々は収奪することなく、よき領主として村々をたいせつに治めていた。身分高きも卑しきも、おのれの分を守って日々を送っていた。万事が同様であった。こうした天下太平の様に悪魔が業を煮やした。このあわれな者めは太平をかき乱し、歓喜を涙に変えた。ヴィティザの息子らは、この世に生まれてくるべき者たちではなかったであろう、なにしろ裏切りのきつかけとなったのである。悪魔が企みを巡らし手を突っ込んだ。こうして亡国への道がはじまった。周知のごとく、ドン・フリアン伯が貢ぎ物を受け取りにモロッコへ渡っていたあいだに重大事が出来し、それで国が跡形もなく滅びたのであった。怒り狂った伯は奸計をめぐらした。そうして強大な力を持つタリクと密談し、キリスト教徒を叩き潰す方策を吹き込んだ、かくすればスペインを守る術はどこにもあるまいと。そのときドン・フリアーン伯はこう言ったのだった。

「わが友タリクよ、まことの話、あなたにスペインを与えられねば食を絶つ覚悟。もしもそれができねば、わたしのことは犬ほども気にかげずともかまわぬ。これからただちに海を渡り、ドン・ロドリゴ王に家臣を集めさせる。そうして各人の武器をことごとく火中へ投じさせ、もはや身を守る術のないようにしてしまうつもりだ。ことが済んだら知らせるゆえ、全軍を率いて海を渡ってくるがよい。みな油断しきつていであらうから、国を奪うのは赤子の手を捻るも同じ」

それから伯はイスラム教徒どもと別れて海を渡り(……)。大時化に遭って溺れ死にできなかったこのあわれ

な男、ならばわれとわが手で命を断つべきであつたらう。伯は着くとその足で王のもとへいった。

「敬意を表する、王よ、わが誉れ高きあるじよ——と伯は言つた——あなたの言葉を伝え、言いつけを果たしてきた。受け取りを言いつかつた貢ぎ物はこれここに」

誉れ高きドン・ロドリゴ王は伯を懇ろに迎えた。手をとつてそばに座らせると尋ねた。

「わが忠実なる友よ、どうであつた？ 使いの首尾は吉か凶か？」

「あるじよ、わたしの考えを聞きたいのであれば述べよう。あなたを王位に就けたもうた天にまします神のおかげにて、あなたに立ち向かえる者は誰もおらぬ。戦わずともよいのであれば、なにゆえ武具が要る？ 国じゅうに触れを出して処分を命じるべし。そうして鋤に作り直し、葡萄畑を耕す道具となすべし。あるいは鋤の刃に作り直し、小麦の種まきのため使うべし。軍馬、駄馬、一頭残らず農耕に使うべし。騎馬の武者も徒の武者も、みな畑を耕し小麦を作るべし。斜面や谷、丘のことごとくに種をまき、金穀にて国を富ますべし。敵はおらず防人は置かずとよいのゆえ。領主はみな領地へ帰すべし。武具を持ち帰るを禁ずべし。従わぬ者には厳しく臨むべし。耕す役に立てるほか牛馬は持たすべからず。あなたが騎馬武者に俸給を与えるべき理由はなく、各自わが土地を耕し、わが家にて暮らすべし。ラバや馬を使い、広く耕作すべし。おのおのにとつてだいじなのは剣ではなくこちら」

伯が話しおえるや——天下広しといえど、これほど巧みに弁舌を弄せる者はなかつたであらう——（……）。ドン・ロドリゴ王はただちに四方へ使者を送つた。（……） 廷臣が続々と馳せ参じてきた。アラゴーン、それによき国と折り紙つきのナバーラ。レオン、ポルトガル、美しカステイリヤ（これほどの国はどこへいってもみつかるまい）。ドン・ロドリゴ王は頃合いを見て、居並ぶ人々を前に口を開いた。

「卿ら耳を傾けよ。みなにキリストの赦しのあらんことを！（……）。かつてあるじであつたイスラム教徒どもには痛恨事、天にまします神の望みたもうたおかげにて、今スペインは寸土も余さずわれらのもの。一同これに深く感謝を捧げねばならぬ。われらはアフリカにも少なからぬ兵を置く。これに怯え、キリストの教えを信じぬ者どもが貢ぎ物を納める、山ほどの金、山ほどの銀、少しも量を偽らず。いまやわれら、この貢納についてはな

んの心配もいらぬ。卿らよ、伯が和議を結び、百年先まで貢納が約束されたのだ。民はみなみな平穩無事に日々を送れる。なにも恐れずわが家で暮らせる。かくのごとき天下泰平の世となり、おかげで平穩に過ごせるからには、貴賤上下を問わず各自おのが土地にて暮らすべし。鎖帷子に兜、腕当て肩当て腿当て、槍、短槍、刀劍、鏃、石弓、ことごとく火中へ投じ紅蓮の炎を立ちのぼらすべし。かような物、また馬具も鉄の塊に鑄潰して、鋤、鍬、大鍬、つるはし、手斧、斧、まさかり、大さまかりなど、民の仕事の道具を作るべし。かくすればわれら豊かに食べ物を得、老いも若きも、さらには幼き童に至るまで、つつがなく安穩に暮らせよう。異存がなくばかようにしたい。申したことは速やかに行なうべし。命じたそのままを心に銘記すべし。もしも武具を持つと知れたなら、憎き謀反人同様の処置をなすべし。わが命を違えた者は、しかるのち草の根分けて捜し、命じてその身を死刑に処する。裏切り者と知れた者同様の処分を下させる」

周知のごとく、この愚挙は実行に移された。こうした網を打った悪魔はその様子を見届けた。礎は揺らぎ、壁はことごとく崩れ落ちた。このとき失われたものはもはや取り戻すことはできぬ。農民はもう手を挙げて王命を歓迎したが、人々は不幸にも裏切りに気づかなかった。だが物事に通じている者、見る目を持つ者は、これを王に吹き込んだ輩に災いあれと呪っていた。王命は忠実に実行され、武具を持つ者は速やかに手放した。これを仕組んだのは年古りた悪魔、キリスト教徒を害することをのみ願っていた。

三 イスラム侵入

武具が火中へ投じられ溶かされると、その一報がモロッコへ届いた。アフリカでは遅れてはならじと兵が駆けつけた。ただちに海の港へ集結した。各自、スペイン遠征に向け万全の用意をしていた。全軍が揃うと海を渡りジブラルタルという港へ着いた。いったいどれほどの数の軍勢やら、数えようとて数えられまい。アフリカに盤踞するこの異教徒どもは、ヨーロッパの人々を憎む者ばかり。(……)。足を踏み入れられようとは思ひもせぬ地

を踏んだ。キリストの教えを信じぬ者どもはセビーリヤへ至った。この町も、また他の町も、なんら抵抗しなかった。運命の車が悪しき方向へまわっていた。自縄自縛のスペインは打ちのめされていった。窮地に陥った誉れ高きドン・ロドリゴ王は、急ぎ国じゅうに召集をかけた。

「ひと月以内にわがもとへ馳せ参ぜぬ者は、命も財産も失うと心得よ」

命も財産も奪うぞと脅す矢の催促の布告を聞き、抗つて動くまいとする者は皆無。われもわれもと期日に遅れず王のもとへ駆けつけた。されどそれは数こそ多けれ武器なき軍勢。ロドリゴ王は軍勢が揃うと、イスラム軍を迎え撃つべく進発した。この人々は王の罪を償う結果となった、なぜならそれが預言者たちの告げていた運命であつたゆえ。ドン・ロドリゴ王は常のごとく先鋒を率い、イスラム軍と対決すべく出陣し、前に立ちはだかつた。サンゴネラという名の平原に布陣したのであつた。それはグアディアナ川のそば、その川岸あたり。両軍、激しくぶつかりあつた。双方闘志に燃えていた。十字架のもと戦う軍勢は当初から敵を圧倒した。が、そのあとの追撃を怠つた。やがてスペインの人々は刃にかけられ、スペインはもとの持ち主から奪われる結果となる。それが神の定め、神意であつた。異教徒どもはふたたびいくさ場へ戻つてきた。キリスト教勢はいくさ場でイスラム軍に打ち勝ち安心しきつていた。神の前に異教徒どもに対する罪の赦しなどありはせぬが、このとき軍勢はほかならぬ神意により戻つてきていた。翌日の明け方、このキリストの教えを信じぬ者どもは武器に身を固めた姿でいくさ場に勢揃いすると、ラッパを吹き鳴らし、関の声をあげた。天地が揺れ動くようであつた。やがてイスラム勢はふたたび激しい攻撃を仕掛けてきた。いったんやめていた戦いの続きをはじめた。キリスト教勢は大敗、ああ、武運つたなくも！ この日、誉れ高き王の消息は知れなくなつた。のち、ヴィゼウでひとつの墓が発見された。それは王の眠る墓。そこには次のような墓碑銘が記してあつた。「ここに眠るは偉大なる血統の王ドン・ロドリゴ、武運つたなく国を失つた」

聞いているとおりイスラム教徒に敗北。多くが死に、多くが捕らえられた。残りの者はおのれの運命を呪いつつ落ちていった。この負けいくさの噂はたちまち満天下を駆け巡つた。しかし、そのような状況にあつてもカス

ティーリヤ人は賢明な判断をし、聖遺物を集められるだけ集めると、カステイリヤへ逃げ込んで守りを固めた。一方、他の国の人々は敵の刃にかかって命を落とした。カステイリヤ・ラ・ビエーハは要害堅固の地で、足を踏み入れるには一本の道しかなかった。カステイリヤ人はそこを懸命に守った。なにしろスペインじゅうでほかに依るべき場所はなかったのである。アストウリアスは攻め残された。これは海に接する山と谷の狭小な一帯。イスラム教徒は峠を越えられず、そのため手つかずになったのであった。こうして美し国スペインは失われ、キリストの教えを信じぬ輩がその主となった。あわれキリスト教徒は日々塗炭の苦しみ。キリスト教徒がこれほど大きな苦しみを味わったためしはなかった。教会の中に馬飼いが作られ、祭壇では目を覆う蛮行が幾度となく繰り返された。聖具納室の宝物は奪われ、キリスト教徒は日々泣き暮らした。人々にとって赦しがたい所業をもうひとつ語れば、なんとキリスト教徒を捕まえては釜ゆでにし(……) こうして血も凍る恐怖を植えつけた。捕まえておいて、あとで逃がすときもあった。人々に罰が加えられるのをわざと見せ、いく先々でそれを語らせるためであった(……)。彼らは人を料理するのを見たと言った。ゆでたり焼いたりして食べたと言った。話を聞いて言葉を失わぬ者はなかった。総毛立ち、どこへ身を隠せばよいのかと途方に暮れた。こうして侵入者からの逃亡が相次いだ。(……) 山中で飢えに苦しみ抜き、ことごとく死んだ。その数、十人、二十人、いやそれ以上。そうした人々は多くが恐怖で分別を失い、母親を殺し、わが子を腕に抱いて殺した。夫は妻に、妻は夫にかけるべき言葉がなく、少なからぬ人々が悲嘆のあまり正気を失ってさまよい歩いた。逃亡し身を隠していたあわれな人々にとって、幸せに溢れていたかつての日々は影も形もなく、こうした飢え苦しむ毎日を耐え忍ぶより、いっそ死んで埋められるほうがましと絶望していた。昔のうのと暮らしていた人々は、いまやこの世でどう生きればよいかわからず、かわいいわが子の乏しい食べ物食らうありさまであった。貧者が富者に、富者が貧者になった。この運なき人々は悔いていた。

「われらは星のめぐり合わせ悪しきとき生まれ、神に授かったスペインを守れなかった。塗炭の苦しみに泣こうと当然の報い。愚かさゆえに大きなあやまちを犯してしまったのだ。われら父祖のごとくであったなら、かく

のごとき悪辣なる輩によいようにはされまいに。あちらが強く、こちらが無力であったゆえ、あの者らに対し狼の前の羊の赤児同然。われらは神に背き、神はわれらを顧みなかった。父祖の勝ち得たものを、われらはことごとく失った。われらは神に背き、神はわれらを見捨てた。ゴート人の築いた財産はなにかも失われてしまった」

神はこのとき大きな力を悪魔に与えたもうていた。イスラム教徒は峠すら越えて荒らし尽くした。そうして信じがたいことながら、遙かトゥールのサン・マルタンまで到達したと文書は記す。カステイリヤの人々は食物の乏しい猫の額ほどの土地へ押し込められ、果てしなく続く辛苦を生きた。いつ終わるとも知れぬ途方もない苦しみに悶え、キリストの教えを信じぬ者どもへの恐怖に震えた。だがこうした辛苦に喘いでいても、キリストの御恵みだけは疑わなかった、いつかみ恵みを垂れ洗礼を受けぬ者どもを打ち払いたまうであらうと。

「主よ、助けたまえ——と彼らは祈った——失った土地を取り戻させたまえ」

その間マンスールに美女百人、いまだ妻ならぬ身の処女^{おとめ}らを献上せねばならず、そのためカステイリヤじゅうを探しまわった。断腸の思いであつたが、いたしかたなかった。こうした苦難が果てしなく続いた。あわれなキリスト教徒の人々、血を吐く思い^{おもひ}にのたうつ彼らは祈っていた。

「主よ、ありがたきみ恵み垂れ、われらを助けたまえ。あなたは荒れ狂う海から聖ペテロを救いたもうた。主よ、あなたは聖カタリナを助けて賢者らを論破させ、王妃エステルを死より解き放ち、処女マリナを竜より救いたもうた。なにとぞわれらの傷に慰めと癒やしを与えたまえ。主よ、あなたはダビデを獅子より救い、人を人とも思わぬペリシテ人を殺し、バビロニア王よりユダヤ人を解放したもうた。なにとぞこの生き地獄の牢獄よりわれらを出したまえ。解き放ちたまえ。あなたはスザンナを長老どもの嘘より救い、ダニエルを二頭の獅子より、聖マタイを猛々しい竜より助けたもうた。主よ、われらもまたこの試練より助け出したまえ。あなたはキリストの教えを信じぬ輩が、燃えさかる炎に投げ入れた三人の子供を救いたもうた。彼らはまこと歌うにふさわしき歌を籠の中で歌ったのであつた。そしてまたあなたは、蛇の口よりふたたび彼らを逃がしたもうた。福音史家ヨハネは、毒を飲んで死んで横たわる泥棒二人を前に、衆人環視の中同じ毒を大杯で仰いだが、松の実を食べたほどの害もなかった。このよ

うにあなたは毒の力を消し、おかげでヨハネは無事。主よ、優しき心もてわれらを助けたまえ、われらが栄えるも滅ぶもあなたしだいゆえ。主よ、われらは知る、あなたは天よりくだり、聖母の胎内にてまこと受肉し、われらのためおおいなる代償を払いたもうた。今こうしてわれらの滅ぶのを見すごしたまうなかれ。われらはおおいなるあやまちを犯し、あなたに対して罪を犯した。されどわれらはキリスト教徒にて、あなたの律法を守る。あなたの名を護持する。あなたのみもとにある者と称する。われらはひたすらあなたの御恵みを待つ」

四 キリスト教王国——ベルナルド・デル・カルピオ

こうした日々が繰り返され、造物主への祈願は続いた。涙の乾くときはなく、人々は日夜苦しみを訴えつづけた。イエス・キリストは呼び求めに応じ、天使を遣わしてペラーヨを探せと告げたもうた、彼を王に戴き敬えと、一丸となって彼を助けて国を守れ、彼がおまえたちを助け、国を守らせてくれるであろうゆえと。み言葉に従いペラーヨを探した。そうして洞穴の中で飢え苦しんでいるところをみつけた。人々は彼の手に接吻して国を捧げた。ペラーヨは承諾したが、それは意に染まぬことであつた。ペラーヨがまったく意に反して受け取つた一方、人々は彼を得て安堵した。この報がキリストの教えを信じぬ者どもへ届き、遠征のため全軍が集められた。やがてペラーヨ王の居場所を突き止めると、そこをめがけて押し寄せ、ただちに立て籠もる岩山を攻めにかかった。そのときドン・キリストは大いなる奇跡をあらわしたもうた。おそろくこの話は耳にした覚えがおりかと。ペラーヨ王を狙って射た矢も投げた矢も、王はおろか兵にすら一本も届かず、それどころか放つた勢いのまま返り、なんとあろうことか味方を殺したのであつた。かくも恐ろしい光景、なんとわが武器が味方を殺す様を目の当たりにしたイスラム勢は、洞穴の囲みを解いて山を下りた。彼らはおのれたちへの神の怒りの激しさを思い知つた。このドン・ペラーヨ王、神の僕は力の限り奮戦し国を守つた。おかげでキリスト教徒の苦しみは軽減していった。ただ、マンスールへの恐れだけは消そうとしても消えなかつた。ペラーヨ王が死ぬと——王にキリストの赦しの

あらんことを——息子のファビラがあとを継いだ。これはまったくもって悪しき人であったが、神のご意志により、長く国に君臨せず登位後わずか一年あまりで死んだ。ペラーヨ王の娘はとても教養の高い人で、カンタブリアの領主に嫁していた。その領主はアルフォンソといった。武勇に秀でたこの人は、馬上、広大な領土をわがものとした。ポルトガルのヴィゼウを落としたのち、大司教の町ブラガを落とし、それからアストルガ、サモーン、サラマンカも落とし、やがて高い岩山の町アマーヤを落としたのであった。この武運めでたき人アルフォンソ王が死ぬと——かくもよき王となつた人の天国にあらんことを——次に王となつたのは息子のフルエーラ。これは誰もが身をもつて知る悪人であったが、登位後神は長い命を与えたまわなかつた。あとを襲つたのはアルフォンソ。立派な王と言ふべき人で、貞潔王の異名をとる神の僕であった。人々はその治世、鼓腹撃壤の日々を謳歌した。王はサン・サルバドルという名の教会を建てた。この王のことは詳しく述べねばならぬゆえ、話を戻しシャルル王について語ることにする。シャルル王はアルフォンソ王へ書状を送り、遠征してスペインをわがものとする^と告げてきた。アルフォンソ王は返書を返し、甘んじて貢納などせぬ、貴殿に貢ぐぐらいであれば退位したほうがまし、このような取引をすれば愚か者と呼ばれるであらう、と伝えた。また、わたしは今のままありたい、スペインをフランスへ従属させるなどもつてのほか、フランス人は思いあがぬがよい、五年でスペインを手に入れるなどとは！、とも。シャルル王はこの返答を受けて会議を開いたが、適宜適切な進言は聞けなかつた。王の配下の名高い人々は、全軍をもつてスペインへ攻め込むべしと急ぎたてた。シャルル王は雲霞のごとき大軍を集め、カステイリヤめざして進發した。思うにこれは狂気の沙汰、王を唆した者に絶えざる苦しみのあらんことを。この遠征は王にとつて運の尽きとなつたのであった。

ベルナルド・デル・カルピオはフランス軍の進撃を知つた、スペイン奪取を目論み、それを達成すべく全軍挙げてフエンテラビアへ押し寄せてきていると。しかしフランス側の見通しは甘かつた。ベルナルドは大軍を集結させ、しかるのちそれをフエンテラビアの海港へ向かわせた。さらに貞潔王からは麾下の軍勢がそっくり与えられた。こうしてベルナルドはシャルル王がその港から上陸するのを阻んだ。この戦いでフランス軍の王や重臣が

次々と討ち取られた。記録の伝えるところでは、その数なんと七人にのぼった。さらには、疑うなかれ、大勢の將兵が命を落とし、二度と故郷の土を踏めなかった。シャルルは今度の遠征は失敗と悟った。その地点での上陸が阻まれたと見切った時点で、側近の騎士団全員と大勢の兵とともに退却し、マルセイユの港へ飛んで逃げた。フランス人らは港へ辿り着いたとき、よくぞ導きたもうたと天に感謝を捧げた。そうして疲労困憊していた心身を休め、かつ寝た。そのとき戻れたのは希有な幸運と言うべきであった。

そののちまた衆議一決、再度の遠征が決まった。今度こそあとに草木も生えぬほど荒らしまわるつもりであった。ただちに全軍が動員され、側近の騎士団も揃って出陣。強行軍でシズ峠へ到着した。フランス軍は一兵卒に至るまでいくさ支度を万全に整え、アスパ峠を越えて急行してきた。こぬほうが賢明な判断であったろう、二度と生まれ故郷へは戻れぬ定めだったのだから。スペインを手中にすべく、全軍一分の隙もなく支度を整え再来襲してきたフランス人から離れ、武勲赫々たるベルナルド・デル・カルピオへ話を戻せば――。彼はスペイン軍を集結させておいて、側近の騎士団全員を引き連れて発った。これはイスラム退治にかけては折り紙つきの人々。一党は激流奔湍を渡った。それは久しく「エプロ」と呼ばれてきた河で、今日なおそう呼ばれている。そうして、やがて異教徒の地であるサラゴサに着いた。ベルナルドはマルシル王の両手に接吻し、十二傑、かの勇壮な戦士らの来襲に備え、カステイリヤ軍の前衛を務める兵を貸して欲しいと願ひ出た。マルシル王は即答して快く兵を貸し与えたが、このような要請を受けたのは初めてであった。やがてベルナルド・デル・カルピオは泣く子も黙る麾下の軍勢を引き連れて出陣。彼の周りを強固に固めるのはカステイリヤ勢。今度の戦いにあたり、一騎当千の精兵揃いであるスペイン兵に加え、別に前衛を務める兵を持っていたベルナルドは、やすやすと勝利を収めた。フランス軍にとっては前回を遙かにしのぐ惨敗となった。

五 スペイン礼賛

あなたがたの住む土地はどこよりまさと、十分こ納得いたたくため語っておこう。あなたがたのいる土地は、どこをとつても申し分ないが、そのよいところをこれからいちいち挙げてごらんにいれよう。そこはきわめて氣候温暖、酷暑もなければ冬の凍える寒さもない。これほど牧草の豊かに茂る土地はこの世になく、果実の生る木もまたありとあらゆる種類が揃う。中でも抜きん出ているのはラ・モンターニャ。牛や羊の飼育地のこれほど広々広がる土地はここひとつ。そこで飼われている豚の数、これはまこと特筆に値する。スペインの産物の恵みに浴する国は数多い。ここは麻や羊毛も豊富などころ。蠟についてもいわずとした庄巻の名産地。油もまた、天下広しといえどこれほどの産地はみつかるまい。イングランドやフランスもその恩恵をたつぷり受けている。狩猟の適地でもあり鹿がよく狩れる。川の魚、海の魚、どちらも上物にこと欠かず、生であれ塩漬けであれ好きなだけ住人の手にはいる。パンや葡萄酒もありあまるほどで、世界じゅうこれにまさるところ、いや、肩を並べるところすらみつかるまい。処々方々に清水湧く泉、幾筋もの滔々と流れる川、無数に掘られた岩塩坑。鉄や銀の鉱脈も豊富にあれば、純度の高い金の鉱脈も欠けてはおらぬ。山や谷にはよい茂みがそここに点在し、そのどれにも緋色の材料となる臘脂虫がたんといる。スペインの値打ちを二等上げているもののことはまだ言わぬ。良馬についてはまだなにも語って聞かせぬ。馬の産地は数々あれど、スペインはそのどれにもまさる。ここで産するほどの良馬は、世界じゅうどこを探してもみつからぬ。

この話はこれまでにしておこう。十分語つてさしあげた。このあたりで口を噤んでおかねば檻樓が出かねぬ。ただその前にゼバダイの息子、名はヤコブ、この誉れ高き使徒を忘れるわけにはいかぬ。神はスペインを光り輝かせんと強い意向を持たれ、聖使徒を遣わしてイングランドやフランスの上へ引きあげたもうた。それが証拠に、この二つの国に使徒は眠っておらぬ。偉大なる天主は、さらにこのようにしてスペインに榮光を与えたもうた——ここでは幾人もの聖人が天主の御名において殉教し、幾人もの聖なる処女^{おとめ}、幾人もの尊い証聖者が刃に

かかつて死ぬのを恐れなかった。スペインが近隣の国々にまさるごとく、そこに住むあなたがたも一頭抜きん出ている。あなたがたは思慮深き人々。父祖譲りのすぐれた分別を備えている。これについては満天下でとりわけ名が高い。けれどスペイン各地の中でも筆頭はカステイリヤ、国のはじまりがほかより偉大であるゆえ。常に変わらず主君を守り畏敬し、それゆえ天のお恵みあつて版図が大きく広がった。しかし思うにさらに抜きん出ているのはカステイリヤ・ラ・ビエーハ、もといとなつたところゆえ。物語の結末を見ればわかるが、寡兵ながらも多くの領土を切り取った。けれどこの話はこれぐらいでやめておこう。これ以上続けて間違つてはならぬ。それに冗長はよろしからず。ドン・アルフォンソ、貞潔王へ話を戻そう。この人は知勇兼備の王にして、神の僕、おおいなる味方。この世から召された際には至福の来世へと旅立つた。他方そのときから国にあるじがいなくなり、スペインの人々は塗炭の苦しみに陥つた。みな互いにいがみ合い果てしがなかった。あるじなき人々は悩み苦しんで嘆いた、「生まれてこぬほうがましであつた」と。

六 カステイリヤの判事たち

カステイリヤの人々は、このようなありさま、一致して王が立てられぬのを前にして、牧者がなくてはうまくやってゆかれぬと考え、山犬を追ひ払える人を選んだ。そうして衆議一決、威望ある二人を選んで判事に戴き指図を仰いだ。王不在の時代は長く続いたのであつた。歴代の判事は数々の戦いでイスラム教徒相手に奮戦し、一騎当千の武勇で広大な土地を切り取った。まずはその判事らの名を列挙して、しかるのちその子孫について語るとしよう。最初に指を折るのは万夫不当の剛の者たるドン・ヌニョ・ラスーラ。闘将フェルナン・ゴンサレス伯はこの血筋にほかならぬ。その片割れはよき武人ドン・ライーノ。シッド・カンペアドルはこの血筋。ヌニョ・ラスーラの息子はゴンサロという名であつた。知恵にすぐれ武に秀で、全身全霊を傾けキリストの教えを信じぬ者どもをそのつど撃退し、領地を立派に守り抜いた。このゴンサロ・ヌニェスには息子が三人あつて、揃つて傑

物、勇者であつた。彼らはインファンソンの人々へ土地を分け与えたが、今日の境界はその分割をもとに定まっている。長男はドン・ディエーゴ・ゴンサレス、次男はロドリゴ、末の息子はフェルナンドといった。兄弟揃つて勇者であつたが、中でも末の息子は豪傑で、イスラム教徒のマンスールめから広大な土地を奪いとつた。勇士ディエーゴ・ゴンサレス亡きあと、領地はまとめて弟の一人に受け継がれた。ドン・ロドリゴという名の次男。まこと長きにわたりカステイリヤの人々の棟梁であつた。やがて天の定めたもうたときがきて、ロドリゴ・ゴンサレスが至福の来世へと旅立つと、領地はすべて末弟に引き継がれた。彼はドン・フェルナンドといい、大剛の人であつた。当時カステイリヤといえど猫の額ほどの広さしかなく、一方の境界はモンテス・デ・オカ、もう一方は盆地のイテロ。カラソはいまだイスラム領であつた。当時カステイリヤはすべてを合わせてもひとつの町ほどで、貧しくとるにたりぬ地域であつたが、人々は常に勇敢であつた。このカステイリヤ人のありようは、今日もなお見て取れる。カステイリヤ人の願ひはひとつ、わが棟梁が位人臣を極めること。やがて人々は貧しい町を伯領に格上げし、そのち王国の筆頭とした。

七 フェルナン・ゴンサレス

初代の伯となつた人はフェルナンドといい、古今無双の戦士であつた。イスラム教徒にとつては死神。伯はその戦いぶりの激しさから鬼神と呼ばれた。キリストの教えを信じぬ者どもと激闘を繰り返し、地獄の苦しみを味わわせ、カステイリヤの領域をおおいに広げた。その時代にはおびただしい血が流れた。また、ドン・フェルナンド伯は寡兵を率いてスペインの各王とたえまなく戦い、一步も退かなかつた。伯の事績を語ること自体、偉業と言える。話を先へ進める前に、伯の幼少期をあなたがたに語ろう。伯は貧しい炭焼きに連れ去られ、長い年月森の中で育てられた。炭焼きは働いて得たものを、高貴な子供にいくらでも惜しみなく与えた。あるとき炭焼きは彼に、いかなる血筋の子であるかを明かした。聞いて少年は喜びかぎりなかつた。少年は物心つくころ、イ

スラム教徒がカステイリーヤを荒らしまわっていると聞かされた。

「キリストよ、われを助けたまえ——と、彼は祈った——この身を委ね奉る。聞けばカステイリーヤは苦しみに喘いでいるとか。主よ、もしもそれが御心に叶うのであれば、今こそ気まぐれな運命の車をまわしたまうべきとき。カステイリーヤ人は苦しみに苦しみを重ねてきた。これほど悲運に泣いた人々はおらぬ。主よ、いまや苦屋を出るべきときかと。われが猛き熊たるは森に住むためにあらず。もはやわが将兵はわれあることを知るべきとき。われも世を知り、いまだ知らぬ物事を知るべきとき。カステイリーヤはわが兄ドン・ロドリゴに死なれ、杖とも柱とも頼む人を失った。兄はイスラム教徒の不倶戴天の敵であつた。今ここを出ぬとすれば、われはただの木偶の坊となり果てよう」

彼は貧しい養い親とともに森を出て里へ向かつた。その報はただちにカステイリーヤじゅうを駆け巡つた。人の子と生まれた者にこれ以上の喜びはなく、カステイリーヤじゅうからわが棟梁を拝もうと集まつてきた。老いも若きもみなその姿を目にして歓喜し、伯領を残らずその手に委ねた。人々にとつてこの世でこれにまさる棟梁はなかつた。いまやカステイリーヤの棟梁となつたと知つたフェルナンドは、天へ向かつて手を伸ばし、神に祈願した。

「主よ、罪深きこの身なれど、われを助け、カステイリーヤを積年の苦しみより救い出させたまえ。主よ、知勇、分別をわれに授け、キリストの教えを信じぬ輩に恨みを晴らさせたまえ、失つたものをいくばくかなりとカステイリーヤに取り戻させたまえ、われが多少なりとも御身にお仕え申したと思ひ召しただきたく。主よ、人々は長年にわたり七転八倒の苦しみ。キリストの教えを信じぬ者どもから責め苛まれてきた。主よ、王の中の王よ、われを助け、カステイリーヤをあるべき姿になさしめたまえ。もしもわれらが罪を犯し御身の怒りに触れたとて、かほど重き罰はふさわしからず。なにせわれらはスペインじゅうの人々の囚われ人。思うにあるじが奴隸などとは道理に合わぬ。主よ、御身は知る、われら、いかなる日々を耐え忍ばねばならぬか。されど御身を呼び求めても耳を貸したまわぬ。われらはどうすればよいやら途方に暮れ、ただ嘆くばかり。主よ、われら一同こぞつて御身の助けを待つ。主よ、なにとぞ願ひ奉る、御身にお仕えするわれより離れたまうな。主よ、御身の後ろ盾をた

まわれれば、広く領地を切り取ることを得、カステイリヤは責め苦より救われよう」

八 カラーソ攻略とマンスール来襲

若武者は非の打ちどころない祈りを終えた。衷心よりの祈願はしかと天に聞き届けられた。彼はキリストの教えを信じぬ輩と激闘をつづけ、生涯無敗を誇った。このときもまた、歳は若いながら一刻も猶予せずイスラム教徒に対し猛反撃を開始。麾下の軍勢を率いて出陣し、カラーソを囲みに向かった。そこは峨々たる山塊、要害堅固の地。カステイリヤ伯とその家臣団は各自一戦士となつて城を攻め、一方徒武者は短槍や投げ槍で戦った。それは神への一途な奉仕にはかならなかつた。イスラム側はまったく術なく、マンスールが救援に駆けつける間もあらばこそ、その前に圧倒されて敗れてしまい、城はキリスト教徒の手に落ちた。急報が届いてカラーソ落城を知つたマンスールは言つた。

「伯めには手ひどくしてやられた。もしもこれを雪辱できぬとすれば、わたしは生まれながらに運に見放された男」

マンスールは大至急四方へ使者を走らせた。書状を携え踵を接して発つ使者——騎馬武者も徒武者も急ぎ集まるべし、上に立つ王らは真つ先駆けて馳せ参じよ。マンスールのもとへ家臣らが参集した——諸王、リコ・オンブレの面々、そしてあまたのインファンソン。騎馬武者、徒武者すべてを合わせれば、その数たるや軍団五個分ではきくまい。軍勢が揃うと、マンスールは憤怒の鬼と化してカステイリヤへ向かい、進軍を開始。草の根分けても捜し出してやると、伯に凄まじい脅しをかけていた。この報はすでに伯の耳にはいつていた——マンスールが来襲すべくアル・アングルスじゅうに召集をかけている、かつてかほどの大軍勢を催した大將はおらぬ。伯は、一人残らずムニョへ馳せ参じわが軍へ加わるべしと、急ぎカステイリヤじゅうへ触れをまわした。そのかたわら、最前線の代官らへ一報してマンスールの来襲を伝えた。伯は合意を形成すべく家臣団と協議した。敵

を求めていくか、それとも迎え撃つか、どちらが上策と考えるか、これにつき一同の意見を求めたのであった。慎重居士のゴンサロ・ディアスが申し出た、耳を貸されよ、愚見を述べたい、と。

「お聴きあれ——と彼は言った——どうか卿らにキリストの赦しのあらんことを。われら、今は戦うべき時にあらず。もしもなんらかの方策あつてこのいくさを避けられるものなら、それが和議であれ貢納であれ厭うべきではあるまい、相手の心をなだめられるのであれば。物や金で片のつくことは数々あれど、いくさばかりはみずから臨まねばならぬ。体も魂もすべて賭けねばならず、金銀を用いたとてどうにもならぬ。キリストの教えに背く者どもは雲霞のごとき大軍勢、騎馬武者も徒武者もみな用意おさおさ怠りなし。われらは小勢にして武器も貧弱極まりない。そうして、敗れば一人残らず首を刎ねられよう。もしもマンスールと和議し、貢納か約定でいくさが避けられるなら、これぞ手の届く中で最上の策。他の策を採ろうものなら身の敗滅となりかねぬ。愚見は以上。その拙さはお赦しあつて、次は諸卿のご高説を承りたい。なにとぞ伯によりよき献策をなされよ」

伯はゴンサロ・ディアスに不満であつた。よい進言とは思わなかつたのである。伯は怒りを覚えながらもそれを押し隠して話したが、進言の中身にはいちいち反論した。

「どうか聴いてもらいたい——と伯は言った——ドン・ゴンサロに真つ向反論したい。申し述べたいいちにつき異議を唱えたいのだ、なぜなら彼は言うまじきことを口にした。まずは戦いを避けよと言つたこと。されど人はいつかは死ぬ定め。死は免れぬと知るからは、死に花を咲かすこそだいじではないか。貢納と引き替えに和議を結ぶなら、われらはあるじから家臣になりさがらねばなるまい。そうなればカステイリヤを苦しみから救うどころか、今の苦しみを倍にするはめになる。偽りでなにかを得る以上に悪しきことはない。これに手を染めるのは大きな誤り。救い主は偽りを退けんとして亡くなられたではないか。騙すより、騙されるほうがましなほどなのだ。われらの父祖は常に誠を忘れなかつた。土地を受け継ぎ、その心もまた受け継いできた。死を恐れず誠を尽くしてきた。望むものはその都度そうして手に入れてきた。まちがつても悪事などには手を染めなかつた。これについては誰にも後ろ指を指されなかつた。抵^{かた}当に置くも売るもできぬものを受け継いだのは、おのれの値

打ちを下げるためではない。

われらの父祖が務めとしていたのは、みなの中から最良の者を選んで棟梁にいたたくこと。そうしてその棟梁の馬前で死ぬのが道であった。(……) 父祖につき、いまひとつ忘れてならぬことがある。棟梁が理不尽な所業に及ぼうとも、恨みなどいだが常に変わらず忠義一途であったのだ。誉れ高きドン・ロドリゴ王が国を失ったときスペインでは、憎んでも憎みきれぬ敵のせいで、悠久の歴史を誇る地カステイリヤ・ラ・ビエーハを除き、わずかなりとも価値あるものはなにもかも失われてしまった。われらの父祖はイスラム教徒に身動きできぬほど押し込められ、長い年月苦しみ抜いた。数少ない人々が狭い土地に寄り集まり、飢えといくさで辛酸をなめつくした。だが辛酸をなめつくし血を吐く日々を送りながらも、常に敵から奪い、わがものは失なわなかった。死を恐れてあやまつなどたえてなく、それにより敵をことごとく打ち敗った。このようなことをすべて忘れてよいものであろうか。父祖に倣うのがわれらの道。これに思いを致すなら、あやまつことなどできはしまい。しかと思いを致してこそ、人に恥じぬふるまいができるのだ。われら家族のぬくもりを捨て、本来の姿へ戻らねばならぬ。いざ、出陣の支度を。死を恐れていくさから逃げてはならぬ。いくさ場へ赴き、乾坤一擲の勝負を挑むのだ。奮いたて、カステイリヤのものゝふたちよ。臆すべからず。イスラム教徒のマンスールめの軍勢を打ち敗り、カステイリヤをこの抑圧とあやまちから救い出そうではないか。やつめは一敗地にまみれ、わたしは勝利に輝くのだ。あちらは大軍といえど弱卒揃い。(……) 獅子一頭は(……)。狼三十頭は三万頭の羊を食い殺す。味方の人々よ、わたしのよく知ることがひとつある。それは、われらがイスラム教徒のマンスールめに勝つのは疑いなこと、わたしは卿らの働きでスペイン第一の者となつて名が輝きわたり、卿らの名はそれよりさらに光り輝くということだ」

伯は語りおえた。伯の言葉を聞いた人々は勇氣百倍。伯は全軍を従えムニヨを發った。軍勢はララをめざし、そこで宿營した。

九 サン・ペドロ・デ・アルランサとペラーヨ師の予言

知恵にすぐれた人フェルナン・ゴンサレス伯は、猪狩りをしに森へいこうと、愛馬にまたがり陣營をあとにした。そしてバスケバニヤス近くの小川付近で一頭みつけた。猪は険しい場所へ逃げ込んだ。そこには洞窟があり、巢にしていたのであった。しかしなおその洞窟では安心できなかった猪は、一字の僧院へ逃げ込んで祭壇の後ろに隠れた。僧院はびつしりと木蔭で覆われ、そのため建物がすっかり見えなくなってしまうていた。そこでは三人の修道士が困窮を極めた暮らしをしていた。その聖なる建物はサン・ペドロという名であった。岩場へさしかかって馬が使えなくなったドン・フェルナンド伯は、手綱を引いて下馬し、猪が逃げ込んだ場所へはいった。すなわち僧院の中へ歩み入ったのだが、祭壇まで進んできてそこがそうした敬うべき場所であることに気づくと、もはや猪にはかまわず仕留めるのをやめた。

「風や海さえ恐れをいなく主よ——と伯は語りかけた——もし今わたしがあやまちを犯したとて、お赦しいただいてしかるべきかと。処女マリアよ、あなたに申しあげる、この聖なる場所のことは、聖母よ、知らなかったのだ。あなたを立腹させようところへはいりませぬ。はいるとすれば捧げ物をするため、あるいは参るため。主よ、われを赦したまえ。われを責め苛む異教徒どもより守り助けたまえ。キリストの教えを信じぬ者どもよりカステイリヤを守護したまえ。あなたのご加護なくばカステイリヤは滅びたも同じ」

伯が祈りおえたとき、修道士が一人、粗末な住まいから出てきた。名をペラーヨといい、困窮の日々を送っている人であった。彼は伯に挨拶し、なにゆえかくも奥深い場所へやってきたのかと尋ねた。伯は、猪を追ううちここへたどり着いた、味方から離れ、遠くまでできてしまった、運悪くこれがマンスールに知れたなら、生きて逃げのびようにもどこにも逃げ場はあるまい、と答えた。それを聞いて僧は言った。

「どうか、友よ、よければわが家に宿泊なさらぬか。小麦のパンはないが大麦のパンを出そう。言うまでもないが、あなたは敵と戦わねばならぬ身」

申し分なき有徳の人フェルナン・ゴンサレス伯は、ドン・ペラーヨ修道士の招きに応じた。そうして、この隠者の聖僧の手厚いもてなしに感激した。これほどすばらしい宿は生まれて初めてであった。翌日、ドン・ペラーヨ師はわがあるじに言った。

「誉れ高き伯よ、あなたに告げよう。神があなたのゆくてを照らしている。あなたはイスラム教徒のマンスールの軍勢に大勝利を収めるであろう。キリストの教えを信じぬ者どもと大いくさをし、累々たる屍の山を築くであろう。多くの土地を奪うであろう。王らの血も流させるであろう。あなたのゆくすえを語るのはこれぐらいにしておこう。ただし、あなたの武勇は万人に恐れられるであろう。わが予言はすべて真実と知るべし。あなたは二度虜となるであろう。このこと信じて疑うなかれ。あなたは三日以内に、将兵がみな恐れおののくのを目にして深く憂慮するであろう、彼らは前代未聞の驚くべき徴^{しるし}を見、軍勢一の勇者ですら顔色を失うのだ。あなたは彼らになるだけ安心させてやらねばならぬ。あなたたちは女かとも詰つてやらねばならぬ。そうして言葉を尽くして徴の意味を説き明かしてやらねばならぬ。さすればもはや少しも恐れぬようになるであろう。いざ、わが言葉を胸に刻んで發て。この貧しき僧院を忘れぬよう。帰つてみれば将兵らは嘆き悲しんでいるであろう。泣き叫び、あなたを呼び求めているであろう。泣き叫んだとて無理からぬ。みな、あなたがイスラム教徒に捕まつたか殺された、自分たちがあるじをなくし寄る辺ない身になったと絶望しているのだ。彼らはあなたがいてこそイスラム教徒から守られると信じていたのだ。友よ、頼みがある。衷心よりの頼み。いくさに勝利したあかつきには、この貧苦に喘ぐ僧院を思い出してもらえぬか。この貧しき宿を忘れるな。あるじよ、ここに住まうのは三人の修道僧。まこと貧しき仲間。日々の暮らしの困窮は比類なく、筆舌に尽くしがたい。もしも神助がなくなれば、当院は烏有に帰すであろう」

伯は僧に丁寧に答えて言った。

「ドン・ペラーヨ師よ、心配にはおよばぬ。望みは申し分なく叶えられるであろう。いかなる者を客に迎えたか知るであろう。天佑を得てこのいくさに勝つたあかつきには、大将の取り分たる戦利品の五分の一をまるごと

貴院へ寄進しよう。なおそのうえ、わたしが死んだときは、貴院が幾久しく栄えるよう貴院に埋葬するようはか
らつておこう。別に堅牢な聖堂を建立し、中にわが墓所を作るのだ。そこには住居もつけ、神に仕えその戒律を
守る僧百人以上を住ませよう」

武運めでたき伯はおおいに満足し、上機嫌で僧に別れを告げてララへの帰途についた。帰ってきた伯の姿を見
て、それまで嘆き悲しんでいた将兵らは喜びに沸いた。伯は家臣らに出来事を語った——隠れ住む僧に出会った
こと、僧に招かれ客となったこと、あれほどずばらしい宿は生まれて初めてであったこと。

一〇 ララの戦い

翌朝、伯は軍勢に進発を命じた。キリストの教えを信じぬ者どもの数は千倍であったが、伯の軍勢は少数とい
えど猛者揃い。かつ闘志に燃えておらぬ者はなかった。やがてイスラム軍とキリスト教軍は指呼の間に近づいた。
雲霞のごとき大軍勢、野山を覆い尽くして進んでくるイスラム軍は、キリスト教徒などひとひねりと意気込んで
いた。このキリストの教えを信じぬ者どもは、大はしゃぎでラッパを吹き鳴らし関の声をあげながら迫ってきた。
この不幸な者どもの喧噪のすさまじさに、山も谷も動くかと思われた。ドン・フェルナンド伯は一刻も早くイス
ラム教徒とまみえ、干戈を交えたいと武者震いしていた。しかし悪魔が十字架の戦士らに計り知れぬ恐怖を注ぎ
込んでいるのを見て、この日は悪魔の支配する日と信じた。伯の軍勢の中の一人、プエンテ・フィテローはエン
トレビニヨ生まれの勇者が、立派な駿馬にまたがり、拍車をあて、丘の上から駆け下ろうとした。が、地面が割
れ、中に呑み込まれてしまった。それを見て身の毛のよだたぬ者はなかった。

「今起きたことはわれらの罪業のせい。どうやらわれらには神のご加護がないのだ。ここは退くのが賢明。神
助はイスラム教徒にありと、ありあり見てとれるではないか。ならばどうして敵することができよう？」
それを聞いて伯は言った。

「(……) 卿らはさように臆した素振りを見せてもならぬ。この微の意味を説き明かせば、(……) 卿らはかくも固き地面とて割るつわものということ。されば何者が卿らに敵し得よう？ 見れば肝が縮んでいる様子だが、さればなんのわけあつて怯えるのだ。わたしは今日いくさ場でマンスールとまみえ、大いくさするのを心待ちにしていたのだ」

伯は語りおえ、人々は勇氣凜々(……)。伯はあたるを幸い薙ぎ倒した。そしてまたドン・ベラスコというリコ・オンブレ(……)。カステイーリヤのつわものらは力の限り棟梁を守った。死を恐れず厭いもしなかった。主恩の大ききへの思いが死への恐怖を消し去っていた。心正しい者にとつてこのうえない世界が現出していた。彼らのいくさぶりを語るのに多言は要さぬ。あれしきの寡兵があれだけの働きをしたためしはない。稀有にして信じがたいことに思えるが、なんと三百騎であれほどの大軍を打ち敗ったのだ。騎馬武者も徒武者も頑強に戦った。一人ひとりが死力を尽くして棟梁を守った。「カステイーリヤ！」と棟梁が叫べば、全軍、いちだんと士氣があがつた。イスラム教徒どもはこうした勢いに押され、背を向けて逃げだした。伯は何度目かの突撃で敵を圧倒し、マンスールの天幕に迫った。(……) もたらされた凶報に、マンスールは自軍の敗北を知った——死傷者多数、王らのうちの得がたい者らも失った。マンスールはみずから戦うべく「馬引け！」と命じた。実際にそうしていれば、キリスト教徒に討ち取られるか捕虜にされるか。カステイーリヤ側には願つてもないなりゆきであったにちがいない。だが異教徒の将兵は彼を止めた。くどくどしくは語るまい。マンスール軍は敗れ、それによりメシアの力が証された。伯はダビデ、マンスールはゴリアテにほかならなかった。ほうほうの体で逃げながらマンスールは叫んだ。

「おのれ、ムハンマド、おまえを信じたのが間違い！ おまえの力などまったく頼むに足りぬ。わが軍はあれほどの大軍であつたのに、ことごとく死ぬか捕らえられるか。兵らを死なせ、なにゆえわたしは生き残つたのだ！」
野は死屍累々(……)。この負けいくさで五体満足な者は皆無であつた。

—— サン・ペドロ・デ・アルランサ僧院への寄進

異教徒は打ち倒され、カステイリヤ軍は勝者となった。フェルナン・ゴンサレス伯とその将兵は、ともに野を越え山を越えて追撃した。彼らはかくもおおきな奇跡をあらわしたもうた神と聖母マリアに感謝を捧げていた。追撃戦はまる半日続いた。貧しい町はその日を境に貧しさとは無縁になった。マンスールが千里の彼方へ逃げ去ったのち、いくさ場にはキリスト教徒がひしめていた。彼らは神より賜わった財を集めてまわったが、それはあまりに莫大で、数えようとて数えられる量ではなかった。天幕の中は宝の山、大量の純金の杯や器——前代未聞の数の財宝がうなっていた。これだけのものが手にはいれば、アレクサンドロスやポロスですら笑いが止まらなかったにちがいない。また、豪華な鞆や袋も大量にみつかった。もとより中に詰まっていたのは鏝銭などではなく金貨や銀貨。幾張りもの絹の天幕、多数の幕舎、何振りもの剣や幾両もの鎖帷子、数多くの馬具も捨てられていた。さらにそこには象牙の最高級の小箱もみつかり、それぞれの中身を見れば金銀宝石が数えきれぬほど詰まっていた。これらの箱はおかたがサン・ペドロ僧院へ寄進され、今日なおその祭壇に供えられている。こうした金銀財宝は銘々が好きなだけわがものとした。それでも三分の二以上は持つていくことができなかったが、武器についてはみつけたものにはひとつ残さなかった。それから、集めた戦利品を残らず携えてサン・ペドロ僧院へ向かい、着くと神に感謝を捧げた。老いも若きも祈りを捧げた。みなで声を合わせて「神に感謝」と唱え、そののち各自、金銀宝石を祭壇に供えた。武運めでたき伯は、神の賜物である戦利品全体の中から五分の一を取り分けさせた。取り分となったものはどれも伯の奮闘の成果。伯はそれを一夜の宿を貸してくれた僧に贈った。伯とその一党、加えて十字架の軍全軍はブルゴスの町へ揃って帰還。みな、疲労困憊していた体を休め、そして寝た。怪我人には金創医が呼ばれ、手当が施された（いくさで大怪我を負った者のためであった）。武勲赫々たるフェルナン・ゴンサレス伯は、このときすでにある知らせを受け眉根を寄せていた——ナバーラ軍がカステイリヤの村々を荒らしまわった。（……）

一二 ナバーラ王のカステイリヤ侵入と伯による賠償請求

伯が全軍を率いてイスラム教徒と戦い、神の御心に適っている隙をついてナバーラ王が動いた。カステイリヤじゅうを略奪してまわろうというのであった。一報を聞いたカステイリヤの人々は、黙って耐えるしかあるまいと涙を呑んだ。いわく、

「われらは悪しき時に生まれたあわれな者。それゆえ天下じゅうから攻められる」

これを耳にした伯は情けなさに気が遠くなる思いであったが、やがて荒獅子となつて以下のごとく吼えた。

「兵馬に問うて思い知らせてくれる！」

その言葉に、カステイリヤの人々は奈落の底へ落とされた気がした。救い手たるべき人が、反対に彼らを追い詰めたのである。

「主よ——と、伯は祈った——われを助けたまえ。そうして、かような傍若無人の所行の根をただちに絶たせたまえ」

伯はドン・サンチョ王へ遣いを送り、なにがしかの賠償を行なう用意があるか問い質させた、それが道理であり身のためでもあると。また、もしも王が不承知なら勝負を挑んでくるようにとも命じた。使いの騎士はドン・サンチョ王のもとへいつて申し述べた。

「まずは、王よ、敬意を表する。わたしはカステイリヤ伯の使い。伯よりの言葉を残らず伝えよう。伯は陛下に対して憤懣やるかたない」と知るべし。もしもそれを鎮めてくれれば感謝するであろう。あなたは長年カステイリヤに手を出してきた。年に二度襲いきて略奪を働いた。カステイリヤを荒らし、カステイリヤの人々を滅ぼさんと異教徒と手を組んだ。キリスト教徒相手に不当ないくさをしかけた、あなたに従うことを肯んじなかったためだ。ほかに伯が腹に据えかねていることがある。あなたはそれに輪を掛けた傍若無人の所業に及んだ。なんとわがあるじがあちら側、イスラム領を駆けまわっている隙に、あるじの領地で卑劣な乱暴狼藉を

行なった。この伯の憤懣を鎮めたく思い、道理に則り賠償する用意があるのなら、それは正しいこと、また身のためでもある。もしもこれを拒むようなら、いくさを挑んでこいとの命を受けている」

使者が口上を終え使いの役目を果たすと、今度はドン・サンチョ王が口を開いてこう話しはじめた。

「賠償など鏝一文するものか。ほれ、伯のもとへ帰ってこう伝えよ。わたしに勝負を挑むとは、いやはや驚き入ったしだい。然るべき忠言を言う者がなかったな。この賭けに勝てるはずなどあるものか。蛮勇を振るいわたしに挑むとは、ただその一事で浅はかな愚か者とよくわかる。このたびイスラム教徒に勝ったゆえ、それで逆上せあがつてこうなったのか。伯に伝えるがよい。ただちに発っておまえを探し求める。城に抛ろうが城壁の内に籠ろうがわが手からは逃れられぬ。どうしてもと言うなら海の底へでも潜ることだ。なにゆえわたしに挑むような真似をしたか、伯めに問ひ質してやるぞ」

烈火のごとき王の怒りに触れた使者は震えあがつて帰り、ありのままを伯に伝えた、いかに激烈な恫喝であったかと。伯は家臣を総呼集した、すべてのリコ・オンブレおよびインファンソン、さらには楯持ち、徒武者まで。おのおのの考えを聞こうというのであった。一同が寄り集まったところで伯は口を開いた。伯の心の内に怒りの炎が激しく燃えあがつているのを感じぬ者はなかった。

「一同よ、屈辱を晴らすため、評定を開かねばならなくなった。われらはナバーラからいかなる仕打ちを受けるいわれもない。一度たりと無法はせず、恥辱とて加えておらぬ。ところがあちらからは山ほどの仕打ちを受けてきた。その償いを求めようにも、これまではその折りが皆無であった。彼らはわれらに償う気であると、無法、非道の罪滅ぼしをする気であると思っていたが、その実われらの怒りを倍にしたらしい。わたしやみなにくさを挑んできた。一同よ、かくのごとき人を人とも思わぬやりように対し、黙っている法はない。たとえ枕を並べて討ち死にするとも、一矢報いようではないか。ひたすらつらく苦しい思いを堪え忍ぶのは恥。いぎ、打つて出よう、わが家臣たちよ。敵は大軍とはいえ、戦ってこそ道は開けるのだ。その場に臨んでは少しも怯む色を見せてはならぬ。敵に怖るほどの卑怯はない。言っておくがいくさする兵は玉石混淆。百騎で勝つ野合戦もある。

ひとつ心の百騎は心揃わぬ三百騎にまさるのだ。軍勢の常、敵方にも強兵と弱兵があろう。いざとなれば弱兵は持ちこたえられまい。その綻びをついて強兵をも打ち破れるはず。われら、こうなる様を幾たびも見てきたではないか。なるほど敵は騎馬武者の数、徒武者の数、いずれも遙かにわれらにまさる。加えて一人ひとりがまとと剽悍。槍も投げ槍も、使えばし損じず、忠義に厚い楯持ちというよき供も連れている。なればこそわれらは踏み出して戦わねばならぬ。受けて立つのは敵を利用するにほかならぬ。われらが怯まぬと悟れば、攻めかかるまゝにいくさ場を明け渡すであろう。いまひとつ言うことがある。よく心に留めておくがよい。わたしは討ち死に覚悟。そうならぬまでも、危うい背戸際に追い込まれるかもしれないが、もしもそれを目にしたらば、カステイリヤ人たちよ、そのとき一同がいかに救ってくれるか見せてもらうぞ。持てる力を惜しまず注いでもらわねばなるまい。どうにかして王の居場所へ達することができたなら、加えた恥辱の償いを求めるつもりだ。命での償いはまぬかれまい。仮にそのとき刺しちがえるはめになろうと本望だ」

一三 エラ・デゴリヤダの戦い。サンチヨ王の死。

武勇の誉れ高き伯は檄を飛ばしおえると、軍勢に進発の号令を発した。そうしてナバーラ領内へはいって一日進んだのち、エラ・デゴリヤダでドン・サンチヨ王とまみえた。王は伯が憤怒に燃えて来襲したのを知り、その広闊な野に軍勢を展開させたのである。カステイリヤ伯のその名も高き軍勢は、いたずらに時をすごさなかった。槍を構え突撃を開始。伯が真っ先駆けけたのは、かたがたお聞き及びのとおりである。ナバーラ王ドン・サンチヨはこうして押し寄せてきたのを見ると、待ち構えていた自軍とともに迎え撃ちに出て、相手の先鋒へ駆け入った。伯のいるあたりへ全軍が殺到した。両軍、激しく干戈を交えた。ナバーラ軍は苦戦しながらも死にものぐるいで戦った。双方とも鬪志はすさまじく、戦いの音は遠くまで響いた。槍の折れる音、剣で斬り結ぶ音、兜の打ち割られる音は耳を聳せんばかり。ナバーラ軍は「パンプロナ!」、「エステリャ!」と叫び、カステイリヤ

の剛の者らは「カステイリーヤ!」と雄叫びをあげた。ドン・サンチョ王もときに「カステイリーヤ!」と叫んだ、フランス人がよく嘲るような調子で。

武勇の誉れ高き伯とナバラ王は、互いを探しまわった。そうして姿を認めあうと、持っていた槍を相手へ向けてびたりと構え、全速力で突進。強烈な一撃を交わし、互いに串刺しにした。かつて騎馬武者の勝負でこれほどすさまじい一撃の見られたためしはなく、鎖帷子はまったく着けていないのも同じであった。大怪我を負ったナバラ王は絶望した。一撃のせいでもまもなく命を落とすと悟ったのである。蓋世の勇もたちまち萎え、ほどなく魂が体から離れた。伯もまた一撃を受け重傷を負っていた。右の脇腹をひどく突かれていたのである。伯は「カステイリーヤの者たちよ!」と叫んだ。だが駆けつける者は誰一人おらず、孤立無援となった。カステイリーヤの人々は自分たちはもう終わりと感じた、積みあげてきた勲はこの戦いで崩れ去ったと。彼らは取り返しのつかぬあやまちを犯したのを深く悔い、無念の思いに打ちひしがれた。おのおのわがことで手一杯、誰も伯の救援に駆けつけられなかったのだが、しかしやがてこれは恥とたまらなくなり、恐れもなにも忘れ強引に敵中突破を試みた。彼らは敵の猛攻に耐えながら伯のいる場所へ駆けつけた。その間、大勢討ち取った。着いてみると、武勇の誉れ高き伯が深手を負っているのは明白。みなで四方八方駆けまわり、敵を討った。カステイリーヤの人々が駆けつけ、伯を救いにかかった直後、ナバラ軍が伯へ向かって殺到した。それを力を振るって追い払ったカステイリーヤのつわものらは、伯が死んでしまっているのではとの不安にかられ、血の気が引いた。伯を地面から起こし、傷の具合を見て、もうことごとく死んでいると誰もが思い込んだ。彼らは悲嘆のあまり気が狂わんばかりになった。てつきり死んだと信じ、慟哭した。やがて彼らはナバラ軍にかかっていつて遠ざけておいて、駿馬にあるじを乗せ、血だらけの顔をきれいに拭った。一同、改めて涙を流した。(……) カステイリーヤ軍は鬼神のごとく戦い、敵をさんざん苦しめた。処々方々で、太刀風鋭く振り下ろされる剣の兜にあたる音が響いた。処々方々で、槍の強烈な一撃が交わされた。処々方々で、棍棒の強烈な一撃が交わされた。あまりくどくは語るまい。結局ナバラ軍はいくさ場を去り、あとにはドン・サンチョ王の遺体が残された。伯はただちにそれをナハラへ

運んでいかせた。王の話はこれまでにしておこう（主よ、彼を赦したまえ）。一敗地にまみれたナバーラ人らはあるじの死を泣いた。誰もが復讐への強い思いにかられていた。君臣の情に動かされ、武勇の誉れ高き伯に対し敵愾心を燃やした。

一四 トウールズ伯、ナバーラ王サンチヨのかたきを討たんと試みる

ポアトゥー伯にしてトウールズ伯である人は国王の血縁であつた。これは確かな事実である。伯は領地から美々しくも華やかな軍勢を呼び集め、カステイリヤへ向かつて進撃を開始した。それは大凶の時にあたつた。出陣は遅きに失し、戦いには間に合わなかつたが、伯はその報に接したあとも急行する考えを変えなかつた。誉れ高きナバーラ王のかたきを討たんと固く決心したのであつた。やがて伯はヘタレラ峠へ着いた。ナバーラの人々は揃つて伯を訪ね、戦いの様子を細大漏らさず報告した、どれほどが討ち死にし生き残りは何人か、さらに二日前から伯を待つていたことなども。トウールズ伯は彼らを力強く慰めた。こうしてことをうまく運ぼうと考えたのであつた。（……）

「なぜならカステイリヤの者どもはわたしに對し、かような不埒きわまる所行に及んだゆえだ」

かの伯がすでに峠まで迫つたことは、はやドン・フェルナンド伯の耳に達していた。ドン・フェルナンド伯は大怪我を負つていたが、その体のままそこへ向かつた。伯の家臣らは、これは違ふと伯に對して憤懣やるかたなかつた。一人残らずあるじに大不満。戦いに明け暮れることを強いられていたのであつた。ゆっくり休むことはおろか、ひと息つくことすら許されぬのである。彼らは言つていた。

「これはまさしく悪魔どもの日々。悪魔は昼夜を分かつた動きまわり、疲れを知らぬ。伯はサタン、われらはその手下きながら。われらはいくさが好物、三度の飯より好きで、人の魂を引き抜かねば心が落ち着かぬときている。それにこの世で疲れぬ者はないに、われらだけが疲れを知らぬとは、悪魔の隊列と変わらぬではないか。棟梁はか

ような日々を堪え忍ぶわれらに氣遣いせぬ。またおのれ自身にも……あれだけの怪我を負っているというに。考えたくはないが、伯に万一のことあればカステイリヤは滅ぶ。かほど馬鹿げた滅亡のためしがあったであろうか」衆議一決、棟梁へ諫言することになった、よろしからずとただちに言上することにした、われら武名を輝かせんと逸つてあやまつまい、下手に欲を出して棟梁を失うはめになつてはならぬ、と。又ニヨ・ライノが言つた。

「棟梁よ、あなたがそう望むなら、氣が向くなら、よいと思うなら、当地に留まり、養生に努めてはどうであろう、下手に欲を出してあやまつ結果となつては一大事。われらやあなたのですこの日々、いつたい誰が耐えられよう。あなたの欲は途方もなく、われらは息つく暇もない。仕えていくには足るを知るを忘れねばならぬ。物事はいちどきに成るわけではない。いくさに臨んでは慎重なうえにも慎重でなければならぬ。さもなくば、遠からぬうち取り返しのかめしくじり犯し、そのせいで光り輝く誉れを無にするはめになりかねぬ。われらは知る、吹きすさぶ風もやがてはやみ、荒れ狂う波もやがて静まると。されど悪魔ばかりはいつまでも疲れず、休むことを知らぬ。われらの日々は悪魔の日々に似ようとしている。将兵を休ませよ。あなたも治療に努めることだ。あなたは深手を負っている。まずは養生が肝心。兵もいまだ集まらぬ。彼らの到着を待つのが上策。いまだ多くの者がきておらぬ。彼らを待つのが賢明。あなたの槍傷は十日も経てば立派に治るであろう。それまでには兵も揃うにちがいない。彼らはいくさ場でああなたの周りを固めるであろう。さすればあちらは討ち死にか捕らわれの身、わたしはそれを疑わぬ。棟梁よ、言うべきことは言つた。これにまさる進言は、棟梁よ、わたしにはできぬ。臆病ゆえの言葉と誤解すべからず。わたしはわが魂を守るごとくあなたを守りたいのだ」

ドン・又ニヨが意見を述べおえるのを待つて、武勇の誉れ高き伯、かの堅忍不拔の人が口を開いた。彼はソロモンにも負けぬおおいなる知恵者、アレクサンドロスにもけつして劣らぬ広い心の持ち主であつた。いわく、

「又ニヨ・ライネスよ、なるほどぞうだ。今のありようはおまえの言うとおり。しかし思うに、このいくさ、先へ延ばせとの進言であろうが、誰に吹き込まれたにせよ、それを信じたのはあやまりだ。なにかの支障のないかぎり、このいくさ先延ばししてはならぬ。人は好機を前にして、また次の好機にと思いがちだが、好機はひと

たび失えば二度と取り戻せはせぬ。こんりんさいもとへは戻れぬのだ。なすことなく時をすごさんとする者は、一生便々とすごすだけ。寝て、遊んですごすだけの者。やがて死んだら忘れられて終わり。無為にすごした者も、労苦のうちにすごした者も、どのみち死なねばならぬのは同じこと。どちらもその定めからは逃れられぬ。だが偉業は残つて生きつづけ、後の世の範となる。古今、偉業をなさんと志して艱難辛苦を経ぬ者はない。三度の飯を食いたくとも食わず、肉の欲も忘れねばならなかった。アレクサンドロスの日常など語られることはない。語られるのはもつぱら偉業と騎士的ふるまい。さらにはゴリアテを討つたダビデ王、ユダス・マカバイオス、シャルルマーニュ、ボードウアン、ローラン、ドン・オジエ、ティエリ、ゴンデビュール、ユダス・マカバイオス、シャルルマーニュ、ボードウアン、ローラン、ドン・オジエ、ティエリ、ゴンデビュール、アルナルド、オリヴィエ、テュルバン、ルノー、ガスコーニュのアンジェリエ、アストルフォ、そうしてこの列に加わるもう一人の勇者サロモン。この人々、そうして今名を出さなかったほかの多くの人々は、みずからの挙げた勲により永久に人の心に残りつづけるであろう。もしもあれほどの勇者でなくば、今は忘れ去られているに相違ない。彼らの勲しは世の終わりまで語り継がれていくであろう。それゆえわれら、残りの日数を数えねばならぬ。あと幾昼夜あるかに思いを致さねばならぬ。無為にすごした日々は二度とは戻りこぬ。であれば一同、よくわかるであろう、おまえたちの考えはあやまりだ」と

騎馬武者も徒武者も伯の言葉に納得せざるをえず、誰も異論を唱えられなかった。何事もドン・フェルナンド伯の考えどおり行なわれることになった。伯は説き伏せおえるやただちに進発を命じ全軍を引き連れ行軍、やがてある激流渦まく河へ至つた。それは古来エプロと呼ばれ、今日なお同じ名で呼ばれる河。誰もがそこの宿営はとても危ういと感じた。トゥールーズ勢が河畔に布陣していたのである。が、カステイリヤのつわものらは敵を恐れたのではなかった。激しい槍合戦を繰り広げ、たちまち向こう岸へ押し渡つた。渡河は大きな危険を伴つたので、あらかじめカステイリヤ勢はトゥールーズの將兵を多数打ち倒した。トゥールーズの將兵は抗つたが、無念にも河のほうへ追い込まれていった。溺れる者、泳ぎ渡る者。伯は水をかき分けて進んだ。トゥールーズ勢は河原からも後退を余儀なくされた。伯は砂の河原で隊列を整えたのち、稀に見る猛攻をかけた。武勇の誉

れ高き伯は渡河するなり、怒りに燃えて攻めかかった。追いつかれた者は運の尽き、ほどなく一族へ訃報が届くことになった。心雄々しいドン・フェルナンド伯はトゥールーズ勢の中へ駆け入り、あたるを幸い難ぎ倒した。伯にかかれば鎖帷子もただの布と同じ。まともに勝負を挑もうが小細工を弄そうが伯には通じなかった。そこへわれ遅れじと伯の忠臣らが助太刀に駆けつけた。勇敢なインファンソンをいくさ場へ多数引き連れていたのである。生国もひとつ、心もひとつの面々であった。彼らはトゥールーズ勢を苦しめた。苦しめた、ガスコーニュ勢も。だが敵は大軍、しだいに押し返され大激戦となった。砂の河原には死体の山が築かれていった。ドン・フェルナンド伯は敵をさんざん蹴散らした。しかし敵勢の中を憤怒の鬼と化して猛然と駆けまわったにもかかわらず、勝ちきれないのにひどく苛立つて言った。

「なんとしてもなんとしても、このいくさでトゥールーズの者どもによい目など見せてなるものか！」

伯は力の限り拍車をあてながら敵勢の中へ駆け入った、手に槍を握りしめ槍旗はためかせて。

「武勇の誉れ高き伯よ、どこにいる？」と呼ばわりながら駆けまわった。「さあ、出てこい、ここへ、いくさ場へ！ ドン・フェルナンドここにあり！」

だが二人の一騎打ちはなかった。そのまえにトゥールーズ勢はことごとく逃げ去ったのである。これほど務めに背く人々はなかった。なにせ恐れおののき、名を汚したのだ。彼らはわれがちに深い森の中へ逃げ込んだ。トゥールーズ伯につき従う者はごくわずか。伯にとつて、これほど完膚なきまでに叩きのめされたのは初めてであった。カステイリヤ伯の怒りはそれほど凄まじかった。

一五 トゥールーズ伯の死と埋葬

トゥールーズ伯は、ドン・フェルナンド伯が怒りに燃えて迫ってくるのを前に、身の毛がよだっていた。しかし家臣から立ちすくんでいると思われるではならぬと、躊躇を見せず、武具を身につけ、単騎、迎え出た。ドン・

フェルナンド伯は元来むごい人ではなかったが、このときばかりは怒りにわれを忘れ情けを忘れた。憤怒の鬼と化し、闘志に燃え、武勇の誉れ高き伯に突きかかった。情け容赦のない一撃を加えるのにためらいはなかった。生まれついていたの戦士たるカステイリーリヤ伯の槍は、トゥールーズ伯に致命傷を与えた。ガスコーニュの人は深手に耐えかねて叫んだ。

「聖母マリアよ、助けたまえ！」

トゥールーズ伯はかくして深手を負い、たちまち落馬した。もはや口をきかなかった。ほどなく絶命したのであった。伯の討ち死には即その軍勢の敗北。トゥールーズの騎士らは脱兎の勢いで逃げた。しかし三百人がカステイリーリヤ側の捕虜となった。そのほか、多くの者がそのときその場で討ち取られた。この戦いでカステイリーリヤ戦士の勇名はおおいにあがった。誇り高く心雄々しい伯がトゥールーズ伯をどう扱ったか、それをお聞かせしよう。カステイリーリヤ伯は手ずから甲冑を脱がせた、実の兄弟にするようにそれは丁重に。すべてを取り去ったあと、体を清め、高価な絹の服をまとわせ、精巧な細工を施した椅子に座らせた。椅子はマンスールとの戦いで得た戦利品であった。さらには伯ならではの思いつき、すばらしい出来映えの見事な棺を作らせ、それを赤い布で美々しく覆わせた。使った釘は鏡のようにまばゆく輝く黄金色。それから、捕虜としていた家臣を解き放たせると、その家臣らにそこへきてあるじの供奉をするよう言いつけ、しかるべき場所へ着くまでそばを離れぬと全員に誓わせた。型どおり遺体に着せた死に装束は、このうえなく美しく豪華な生地であった。伯は供奉の者らにあちらへ着くまでの旅費を渡し、上等の蠟でこしらえた大蠟燭を千本与えた。伯が死に装束を着せたあと、棺は蓋をされ、釘で厳重に閉じられ、ただちにラバの背に積まれた。伯はすぐに出立して領国へ運んでいくような命じた。トゥールーズ人あわれ。おのれの悲運を泣きながら、沈痛な面持ちで、途方に暮れつつ、やがて伯領の中心トゥールーズへ着くと、そこでまた悲しみをあらたにした。

* 翻訳には次の定本を用いた。

Alonso Zamora Vicente, ed., *Poema de Fernán González*, Madrid, Espasa, Calpe, 1978.

本作は一三世紀半ばごろに書かれたと推定されるスペインの叙事詩である。原文は韻文だが、同様に韻文で和訳を行なうのは著しく困難なように思い、散文を用いた。自分の才の乏しさを棚にあげて言えば、元来日本語の韻文は長編の物語を語るのには適していないのではないか。こういう場合、韻文にかわるものがあるとすれば、調子のよい散文ではないだろうか。そう考え、翻訳にあたっては散文を用い、かつなるだけリズムカルな感じが出るよう心掛けた。